
 学 会 記 事

第9回新潟周産母子研究会学術講演会

日 時 平成11年10月30日(土)
午後2時より
会 場 新潟大学医学部
有壬記念館 2F

I. 一 般 演 題

1) 肺結核症合併妊娠の一例

加藤 龍太 (新潟こばり病院 産婦人科)
島本由紀子・桜井 守 (同 小児科)

30才, 初回妊娠. 8年前肺結核にて内服治療の既往あり. 妊娠22w時に咯血し, 咯痰中の結核菌DNA(PCR)陽性, 左肺上葉に班状影を認めたことから, 肺結核と診断された. 治療目的に専門施設へ転院し, REF+ethambutolにより治療を開始, 33w退院し外来管理となる(延べ9ヵ月内服継続). 妊娠経過については順調であり, 以前の筋腫核出の既往のため37w選択帝切にて男児を分娩された. 分娩時の羊水・臍帯血および悪露には結核菌は検出されず, 胎盤にも感染所見は認められなかった. 母乳中の薬剤の影響を考慮し授乳は中止した. また新生児に対しては尿・胃液・髄液中の結核菌検査・胸部XPおよびツ反により胎内感染が否定されたが, 水平感染の予防目的にてINHを6ヵ月間内服しその後BCGを施行した. 現在まで結核の発症なく母児ともに順調に経過している.

2) 最近の糖尿病合併妊娠症例について

萬歳 淳一・須藤 寛人
網倉 貴之・安田 雅子 (長岡赤十字病院 産婦人科)
安達 茂実・児玉 省二

1997年9月から今年10月までの2年2ヵ月の期間に, 2058件の分娩中20例の耐糖能異常を含む糖尿病合併妊娠を経験し, 全分娩に対する頻度は0.97%だった. このうちインシュリンを投与した糖尿病合併妊娠6例にお

いて検討した. ウイルス感染による膵分泌能異常例を除く5症例では強い家族歴を認めた. 6症例中3例が妊娠前から治療を続けており, 母体搬送の1例を除いて, 早い週数から治療が行われた. 合併症は, 糖尿病による網膜症のあった1例と, 本態性高血圧を合併した1例があった. 母体搬送2例を除くと, 2症例が血糖管理目的に妊娠中期, 満期に入院となったが, 血糖コントロール良好だった2症例は外来管理のみで分娩となった. 治療開始が遅れた1例は増殖性網膜症の悪化のため妊娠継続不可能となり, 26週で帝王切開となった. その他は全例満期産で, 4例が経膈分娩となった. 5例が一過性の新生児低血糖を認め, 輸液治療を受けた.

3) 当科における糖尿病合併妊娠の検討

山口 雅幸・関塚 直人
東野 昌彦・倉林 工 (新潟大学)
高桑 好一・田中 憲一 (産婦人科)

1994年から1999年10月まで当科で分娩を取り扱った糖尿病(DM)合併妊娠及び妊娠糖尿病(GDM)症例24人26妊娠を対象として各種周産期パラメータ及び異常発現率を求めた. 症例内訳は全26例中DM症例17人延べ18例, GDM症例7人延べ8例であった. 各症例に対し食事療法, インスリン療法などの血糖コントロールを施行したが, 巨大児6例, 胎児奇形2例, 弛緩出血3例, 妊娠中毒症4例と種々の周産期異常を認めた. 母児共に周産期異常を伴わなかったのは8例に過ぎず, これらの妊娠が極めてハイリスクであることが再認識された. また半数以上にDMの家族歴を認めたことから, DM患者及びDM合併妊娠に対し内科及び産科サイドからの更なる啓蒙が必要であると思われる.

4) 生後6日に手術を施行した新生児食道裂孔ヘルニアの1例

内藤万砂文・広田 雅行 (長岡赤十字病院 小児外科)
鳥越 克己・沼田 修
佐藤 尚・鈴木 博
樋浦 誠・臼田 東平
井埜 晴義・金子 詩子 (同 小児科)
須藤 寛人・児玉 省二
安達 茂実・安田 雅子
網倉 貴之・萬歳 淳一 (同 産婦人科)

食道裂孔ヘルニアに対する手術を新生児期に行うことはまれであるが, 今回我々は生後6日に手術を要した新